

萬年 甫先生の思い出

萬年 甫先生がご逝去されました。私は35年前に東京医科歯科大学医学部の学生として先生の訾咳に接する幸運を得ましたが、同級生の優秀な何人かが先生の教室に出入りし、脳切片のスケッチやフランス語の読書会を行っていたのと比べますと、遠巻きに偉い先生を眺めていたごく平均的な学生でした。

和氣先生がお書きになっておられますように、萬年先生の講義は色チョークを使った板書で丁寧に神経路を説明されるオーソドックスなものです。講義ノートをとるのに色鉛筆がこんなに役に立つとは小学校以来の発見だ、などと同級生と戯れ言を交わしておりましたが、3年生最後の講義に、いつもの神経解剖学の講義から離れてご自身がなさったお仕事の話をされました。カハールの原著を読むことのみ

を目的に独学でスペイン語を勉強されたこと、カハールが染めたゴルジ標本を現地でみたときの感動など、講義が終了したときには万雷の拍手が長い間続いていました。当時の私は神経が特に好きな学生でもなく、また、先生の偉さも本当にはわかっていたものと思いますが、神経研究の奥深さや面白さが、先生からの風圧とともにこのとき刷り込まれたような気がいたします。今、私が神経内科の臨床家として教職にあるのも、この日の講義をさばらなかつたためといえるかもしれません。

6年前の神経学会総会が新宿で開催された折、記念講演においでになった先生にこの話をしましたら、はにかんだように笑っておられました。次の世代に神経系の面白さを先生のように伝えるにはどのようにしたらよいか、あのときお聞きできなかったことが心残りでなりません。

神田 隆（山口大学神経内科・本誌編集委員）